巨人退治と民衆暴動

―民衆向け出版物における「反乱」と「鎮圧」の表象―

佐　藤　和　哉

はじめに

本稿が論じるのは、初期近代イングランドの「ポピュラー」な文化のなかで「民衆」や「貧民」はどのように描かれるか、という問題である。話のなかで「民衆」や「貧民」が暴動や騒擾を起こすとき、おもに民衆を対象にしていた読み物はそれをどのように描くのだろうか。本稿で扱う「物語集（ヒストリーズ）」とは、18世紀を中心に主として17世紀から19世紀の第一四半世紀にかけて当時の英語圏で広く読まれていたと推定される廉価な出版物のことであり、後の尚古家や古書収集家による命名にもとづいて、現在でも「チャップ・ブック」と呼ばれることが多いが、本稿では同時代的な文脈によって「物語集（ヒストリーズ）（Histories）」とする。この物語集（ヒストリーズ）の〈読者＝聴衆（オーディエンス）〉は、暴動を起こす民衆の「モラル・エコノミー」を是として、かれらを共感すべき弱者とみなし、民衆の正義にかなう暴動や騒擾であれば良しとするのか、それとも飽くまで社会秩序に反するものとして非とするのか。

本稿では、以下の二つの物語を取り上げてこの問題を検討する。まず、巨人退治の英雄譚である『トマス・ヒッカスリフトの物語（*The History of Thomas Hickathrift*）』を検討し、そのあと、歴史上の事件に題材を取った『ワット・タイラとジャック・ストローの物語（*The Famous and Memorable History of Wat Tyler and Jack Straw*）』を見ることにする。一般に物語集（ヒストリーズ）という出版物においては、架空の巨人退治の物語と実際の農民反乱の話との間に、物語の「真実らしさ」の点で明示的な差が示されない。〈読者＝聴衆（オーディエンス）〉は、一方がフィクションであり、もう一方が現実に起こった話だという違いをどの程度まで認識していたかは疑わしい。そこに描かれる社会についての認識は、おそらく等しく有効であったに違いないと思われる。二つの物語のどちらにも民衆による暴動が描かれるが、その暴動を起こす首謀者らとともにその暴動に参加する人びとの所作や性格がどのように描かれるか、という「暴動の表象」に焦点を当てることで、そこに見られる価値観を抽出してみたい。なお、物語集（ヒストリーズ）が出版されていたのは17世紀から19世紀に渡るが、ここでは、18世紀後半を中心に扱うこととする。

物語集（ヒストリーズ）に関する先行研究

物語集（ヒストリーズ）についての先行研究には、70年代のヴィクター・ニューバーグ、80年代のマーガレッ

ト・スパフォード、90年代のバリー・レイ、そして2000年代に入ってからはジョン・サイモンズらによるものがあるが、ここでは特に、18世紀における中世文学の受容を研究しているジョン・サイモンズを取り上げたい。サイモンズは、物語集（ヒストリーズ）において、「どこで歴史的事実の記録が終わり、どこからが想像力によって創りだされた内容が始まるか、の境界線を、確信をもって引くのはきわめて困難である」（13）と述べている。そして、物語集（ヒストリーズ）を民衆にとっての現実逃避、時間つぶしの文学であるとする議論に反対して、生活が本当に苦しい人びとにとっては想像的な読み物で現実逃避をするのはむしろ実際的ではなく、またそれらの読み物の世界が必ずしも想像上の世界とは受けとめられていない、と論じる。物語集（ヒストリーズ）の読み手は、文字による作品の世界に入ることを通じてナショナルな文化とのつながりを見出し、自分の周囲の世界を理解しようとしていた、というのがサイモンズの論点である（Simons 18-19）。

近年、読者に関する文学研究やマスメディアに関するカルチュラル・スタディーズは、「読み手」や「情報の受け手」がどのように書物やメディアに関わって意味を作り出していったかに着目している。このような潮流は、読書行為についての歴史研究が、「どういう書物を所有したり購入したりしていたか」から「書物がどのように読まれたのか」というふうに「所有」から「受容」へ力点を移してきたのと同じ流れにある。本稿はここで挙げたサイモンズの指摘を受け、かつ書物をめぐるこのような研究状況を念頭に置きながら、物語集（ヒストリーズ）を読むことは、当時の〈読者＝聴衆（オーディエンス）〉にとって単なる現実逃避以上の意味があり、それは世界に意味づけを与えようとする行為だったのだという立場に立つ。

ポピュラー・カルチャーをめぐる諸問題

本稿はポピュラー・カルチャーの歴史を扱っているので、次にこの方面の研究の動向について概観する。その前に、不必要とも思われるような「ポピュラー・カルチャー」という煩瑣な表記を本稿がする理由について簡単に述べておきたい。それは、端的には、訳語が持つ含みに大きな幅があるためである。つまり、「ポピュラー・カルチャー」という語は、「民衆文化」とも「大衆文化」とも「通俗文化」とも、場合によっては「常民の文化」とも訳されうる。そして、それぞれは日本語として異なる含意を持つ。例えば、「通俗文化」と訳された場合には、エリート文化に価値をおき、それとの対比において劣っているという評価を含む用語であるし、「大衆文化」というときには、マスメディアの受け手としての均質な「大衆」を想定することになるだろう。また、この文化の担い手を通時的に考えた場合に、どこまでが前近代的な「民衆」であり、どこからが近現代における「大衆」であるのか、整然と分けることもできない。さらに、「民衆文化」という表記では、その文化が民衆のものであることをすでに前提としていることになるため、本稿が前提とする「社会的エリートも非社会的エリートも参加していた可能性がある」文化について語るのに適当な用語であるか疑問の余地がある。カナ表記にしたからといってこれらの問題をすべて回避できるわけではないことも了解しているが、できるだけ日本語のそれぞれの含意から遠ざけるために、本稿では「ポピュラー・カルチャー」という表記を用いる。

ある社会の文化を区分する指標として宗教・年齢・性差・地域差などが階級と同じ程度に、場合によってはそれ以上に重要であること、また、方法論や史料の点からもエリート・カルチャー

とポピュラー・カルチャーを明確に区別するのは不可能に近いことなどを根拠として、90年代半ば以降の社会史・文化史の研究においては、エリート・カルチャーと峻別することのできる、階級文化としてのポピュラー・カルチャーの存在は否定的に捉えられてきたように思われる。例えば、ティム・ハリスが編集した『イングランドのポピュラー・カルチャー、1500年から1850年頃まで』（1995年）という論文集は、基本的に社会階層よりもこのような分節を重視するような立場を取っているし、バリー・レイは、『イングランドのポピュラー・カルチャーの諸相、1550年から1750年まで』（1998年）のなかで、初期近代におけるポピュラー・カルチャーのキーワードを、「曖昧、複雑、矛盾、分裂、流動的、断片的、性差を含む、ハイブリッドで、互いにかかわり合う、多岐に渡る、互いに重なり合う、複数で、抵抗勢力を含む、なおかつ多くの人びとに共有されている」としている（Reay 1）。一見したところ、これではポピュラー・カルチャーの定義は不可能なようにも思われるが、レイは、ポピュラー・カルチャーを「感情の構造と価値のシステム、すなわち、パフォーマンスとして、あるいは象徴的に、声や文字によって表現される態度と価値観」と定義する。この定義においては、ポピュラー・カルチャーは必ずしも社会階層に対応するとは考えられていない。

しかし、どのような文化的アイテムにアクセスすることができたかがそれぞれの社会階層において同じではなかった以上、ポピュラー・カルチャーの定義から階層性をまったく外してしまうと、ある文化事象への参加状況の非対称性が不明確になってしまうおそれがあり、その点に留保をつけないわけにはいかない。これまでの議論を勘案して筆者なりにポピュラー・カルチャーを定義しておくと、「社会的地位の高低、財産や識字能力の有無にかかわらず参加することのできる表象と、それに表される価値意識の総体」ということになるだろう。逆に言うと、対概念としてのエリート・カルチャーは、社会的地位、財産や識字能力の有無によって参加できるかどうかが左右される。

なお、ポピュラー・カルチャーの研究は、イギリス史、なかでもイングランド史に話を限っても、近年盛んであるとは言い難い（このことは、過去数年分の『史学雑誌』の「回顧と展望」などに目を通すと明らかである）。この分野の研究が低調な理由については、いずれ稿を改めて論じてみたいが、見通しとしては、近年のいわゆる「新しい文化史」において、そもそも「ポピュラー・カルチャー」なるものが存立しうるかという問いが立てられ、それがネガティブに捉えられているのではないかと考えられる。しかし、ここで論じたような、階級ごとの文化の対立関係における非対称性について自覚的であるためには、「ポピュラー」な文化という概念は依然として有益だろうと筆者は考えている。以上のような検討を踏まえたうえで、具体的なテクストの検討に入ろう。

英雄物語のなかの「民衆」

『トマス・ヒッカスリフトの物語』は、貧農の息子で力持ちのトマス（トム）が巨人を倒し、その財宝を手に入れて、その後「ジェントルマン」として生活をおくる話である。物語集（ヒストリーズ）のなかでは比較的長いので24ページの冊子では話が収まりきれず、第一部、第二部の二冊からなる。ここで用いるのはオクスフォード大学ボードリアン図書館所蔵の、ダービーで印刷出版された版で

ある（Harding A157 (26), (27)）。R・C・シモンズ作成のウェブサイトによると、ロンドンのダイシーが出版していることが確認されるほか、ニューカッスル、ペンリス、ホワイトヘヴン、ウルヴァーハンプトンなどでも出版されていた（Simmons）。スパフォードが主な研究対象とした17世紀のピープス・コレクションに収められているものとほぼ同じ内容であることも確かだろう。内容の点でこの話が興味深いのは、例えば「桃太郎」を思い浮かべれば分かるように、「障害を乗り越えて褒美を手に入れる」という、通常はゴールであるはずのモチーフが比較的話の始めのほうに来ていて、その後、財産を手に入れたあとのトムがどのように描かれているか、が縷々語られることである。

スパフォードは、この物語について、「全体としてのポイントは、これが何の役にも立たない、という点にある。それは［…］要するに娯楽であり、議論をしたり政治的な関心を持ったりするという目的はまったく持っていない」（249）と述べている。しかし、確かにこのテクストには政治的なアジェンダが明示的に示されていないかもしれないが、純粋な娯楽物語の中からでも、それが何を価値とし、何を攻撃の対象としているか、あるいは主人公と主人公の周囲の人々との力関係はどのように描かれているか、を読み取ることで、この物語の表象する世界が解読できるかもしれない。貧農の子であるトムが財宝を手に入れてからしたことは「ジェントルマンのように」なることであり、つまりは、大きな屋敷を建ててその周りの土地を囲い込み、そこで鹿を飼うことだった。スパフォードはこれを逃避的なファンタジーであるとし、そこに社会的な抗議が見られないと論じているが（Spufford 249）、それでは、そのような社会的抗議の不在が何を意味するのか、というような点は考慮に価する。

内容をもう少し詳しく検討し、ここで問題となる箇所をとくに取り上げてみよう。巨人を倒して広大な土地を得て、そこに屋敷を立てて鹿を飼い、「ジェントルマン」となったトムは、その勇敢さと力で名を轟かした。領地にやってきた鋳掛屋と対決してその力を知って仲間にしたり、れっきとした家から妻を迎えたりして幸せに暮らしているが、ある日、近郷のアイル・オブ・イーリーで反乱が起こる。物語の語り手によると、「多くの不満のある人びとが一万人かそれ以上も集まって一つの集団を作り、自分たちの権利がはなはだしく損なわれており、それを取り戻すのだと言う」（Part two 2）とのことで、身の危険を感じた州奉行は夜陰に乗じてトムの屋敷を訪れ、助けを求める。トムは仲間の鋳掛屋とともに棍棒を持って「反乱者（rebels）」たちの陣地へ行き、首領にこの反乱の理由を尋ねる。すると、首領は「おれたちの意志がおれたちの法だ。それ以外のだれの言うことも聞くつもりはない」（4）と答えた。その答えを聞いたトムは、それならばこれ以上言うことはないとばかりに、手当たり次第に周囲の連中を棍棒で殴り倒しにかかる。ここからは、物語集（ヒストリーズ）によく見られる、多分に誇張を含んだ戦闘シーンとなる。

> 鋳掛屋は背の高い男の首をものすごい力で殴りつけたので、首が14ヤードも向こうまで吹っ飛び、そこにいた首領に激しくぶち当たり、地面に倒した。トムは、目の前にいるものを、片っぱしからなぎ倒していったが、不運にも棍棒が折れてしまった。しかしトムは少しもひるむことなく、そこにいた頑丈そうな粉屋を捕まえると武器がわりに振り回した。ついに、だれも抵抗しなくなり、その場は完全に制圧された。（4-5）

暴徒の一人を棍棒がわりにするところなどは、ほとんどスラップスティックと言ってもよいような暴れぶりであり、このあたりにも、基本的に笑いをともなう、この物語の娯楽的な性格が表れていると言える。トムは、首謀者数名を捕まえて裁きの座に突き出すが、首謀者たちが死刑となるものの、その他の者はトムと鋳掛屋の口添えにより罪を許される。

このエピソードのなかで注意しておきたいのは、「反乱者」たちの具体的な要求が描かれていないために、反乱者たちがひたすら理不尽な暴徒であるように描かれていること、そして、もともとは貧農の息子であり、このような暴動に加わっていたとしても不思議ではないはずのトムが、反乱を鎮圧する立場に立っていることの二点である。「自分たちの権利が侵害されている」とだけ述べる反乱者たちは、彼らにとってのあるべき正義、侵害から回復されるべき権利を提示しようとしない。反乱は新しい秩序の要求ではなく、破壊のための破壊となっている。このように反乱首謀者たちを理不尽なものと描くことによって、〈読者＝聴衆（オーディエンス）〉の共感が反乱者たちに向かわないようにこのテクストは作られている。一方、扇動されただけの参加者については、州奉行に対して主人公が赦免を願う。この行為によって主人公は、扇動されただけの比較的罪のない民衆の味方であることを示し、〈読者＝聴衆（オーディエンス）〉の共感を得ることになる。

しかし、具体的に描かれていないにせよ、本当に「自分たちの権利がはなはだしく損なわれて」いると感じて、やむにやまれず暴動に訴えるしかなかった社会的弱者による暴動であると考えるならば、かれらを打ちのめし、首を飛ばす「英雄」は、弱者を抑圧して治安維持をはかる権力の暴力性の象徴ではないだろうか。暴動の正当性はこのテクストでは語られず、同時に（おそらくは）多くの〈読者＝聴衆（オーディエンス）〉が同じ立場に置かれたらきっと振るまったであろうと想像されるような、体制にさからう強い意志や反感を持たず、扇動されて、暴徒として反乱に加わらされた人びとに対して主人公を同情的な立場に立たせることで、〈読者＝聴衆（オーディエンス）〉は、体制を守って闘う主人公たちに安心して感情移入して、その闘いにエールを送ることができる。

このテクストには暴動を鎮める側に立つ主人公が描かれており、体制への抵抗にはまったく価値が与えられていないが、一方で、主人公たちの命乞いは、ある種の「言いわけ」として見ることもできるのではないだろうか。著者が明らかでない物語集（ヒストリーズ）の常として、このテクストの作り手がどのような政治的信条を持っていたかは不明だが、この冊子が「売れる」ものである必要があったからには、最大公約数的な〈読者＝聴衆（オーディエンス）〉に受け入れられうるものでなければならなかった。そのために、首謀者ではなく、ただ付和雷同するだけの暴徒は命乞いの対象となった。それは、このテクストが、本来ならば民衆の側に立つことを暗黙のうちに主人公らに要請していた、ということではないか。反抗する民衆とそれを抑圧する体制の争いのなかで、物語集（ヒストリーズ）の主人公は、暴徒をやっつけるヒーローでありながらも、その正義／悪の対立軸のなかで、ほんのわずかだけずれた所に自分の場所を持っている。

「反乱」の歴史的叙述

それでは、このような「反乱」をテーマにした話が歴史物語として語られるとしたらどうなるだろうか。ここでは『ワット・タイラとジャック・ストローの物語』を取り上げる。ECCO（Eighteenth Century Catalogue Online）に所蔵されている、ダイシーによって印刷・出版された版を

中心に扱うことにする（N026953）。

この物語の描かれかたを細かく検討するまえに、「ワット・タイラの乱」と呼称される事件が、日本で一定の権威を持つと思われる標準的な歴史叙述においてどのように記述されているか、イギリス史に関する通史を見ておくことにしよう（青山 377-78）。ことは1380年の人頭税の徴収に始まる。翌年５月にはエセックスで農民一揆が起こり、領主館にある記録類が焼かれて領主の農民支配の法的根拠は抹殺された。６月には指導者としてワット・タイラがあらわれている。一揆の思想上の指導者はジョン・ボールという元司祭で、支配層の腐敗堕落を非難して農民に決起を呼びかけた。６月12日には一揆はロンドンにおよび、当時農民の憎悪の的であったランカスタ公の宮殿や監獄を破壊するなどしたが、略奪はあまりなかった。14日、王と宮廷は農民軍と会見し、農奴制廃止、自由契約による労働、生産物売買の自由などの要求をすべて受け入れた。こののち一揆は市内でカンタベリ大司教らの政府高官を処刑し、農民軍の一部は解散したが、いっそうの急進的改革を望み、タイラが王との再度の会見をもとめて15日おこなわれた会見の直後、タイラは殺害された。指導者をうしなった群衆は解散し、首都周辺の一揆は終わった。城戸毅によると、「こうした1381年の大農民一揆の要求はなんの変革ももたらしはしなかったが、従来政治史になんの役割ももたなかった農民大衆が歴史の表舞台におどりでて社会体制をゆるがすような動きをみせた点にその歴史的意義がある」（380）ということである。この記述は幅広い、しかしどちらかと言えばアカデミックな点ではハイエンドに近い日本の読者に対してイギリス史の通史を語る、いわば決定版としての性格を持っているから、この時代に関する内外の中世史研究の合意となっている認識のうえに書かれていると考えてよいだろう。そのことを念頭に置きながら、物語集（ヒストリーズ）が語る「ワット・タイラの乱」を見てみよう。この歴史叙述は、通史『イギリス史』の語るところとどのように異なり、どのように重なるだろうか。

「物語」に描かれる反乱

この物語は、リチャード二世治世下で、イングランド南部に執拗に攻撃を加えてくるフランスやスペインに対抗すべく軍を挙げるため、議会が一人四ペンスの人頭税を導入するところから始まる。ウィクリフ派で「扇動的」と評される聖職者ジョン・ボールは、貧しい人びと（‘inferior Sort of People’）の間でこの人頭税が不満を呼んでいるのをとらえて、例の「アダムが耕しイヴが紡いだとき、だれがジェントルマンだったか」を説く。これを語り手は、「このような反逆的な説得（‘such-like traitorous Persuasions’）」と呼んで、ボールが組織しようとした人びとを「庶民（‘the Vulgar’）」とし、しかも「こういう人びとは反乱の申し出にのりやすい」などとも注記している。この教えはまたたくまにイングランドの各地に広がり、ロンドンにおいても「平民（‘the Commons’）」、すなわち「貧しい部類の職工や職人たち」の間でもてはやされるようになった。ワット・タイラは、ジョン・ボールや麦打ち人ジャック・ストローなどを参謀として反乱軍をまとめあげロンドンへと進軍する。その道すがら、貴族やジェントリの屋敷を手当たりしだいに略奪し破壊する。

ロンドンで王との直接交渉を要求したため、王はいったんは応じかけるが、その連中が「ごろつきの集団以外の何者でもない（nothing but a Company of Blackguards）」ので、交渉の場へ

赴くことを拒否した。「規則を乱す面汚しども（unruly Rakeshames）」である反乱者たちは、ロンドン市長ウィリアム・ウォルワースに脅しをかけて市内に入る門を開けさせる。反乱軍は飽くまで極悪非道の暴徒として描かれ、略奪・放火・惨殺が執拗に語られる。法学院も襲われ本が焼かれる。反乱軍にとって法に関わる者は存在そのものが悪だというのである。カンタベリ大司教は、以前にジョン・ボールを叱責したことがあったために首を落とされる。王が暴徒に対して何を望むのかを尋ねると、暴徒は口々に土地の解放や生活の安定を叫ぶので、王は議会を開催して改善を図ることと反乱に加わった者の身柄の安全を約束し、それを聞いて多くの反乱者は帰って行った。

しかし、タイラの目的はロンドンを略奪しつくすことと、少しでも学問に長けている者を皆殺しにすることであったので、残りの軍勢を引き連れてスミスフィールドで王と対面した。タイラの悪口雑言に耐えかねた臣下は王にタイラ軍の制圧を進言するが、「狂犬」を挑発することを控える王は飽くまで交渉につこうとする。しかし、王が穏やかな態度を取れば取るほどタイラはつけあがり、「すべてのイングランドの法を廃止すること」などのますます理不尽な要求を突きつけて来た。増長するタイラの態度に危険を感じたウォルワースは、隙を見てタイラが手にしていた短剣を鞘から抜き、一刺しして殺す。リーダーを失った暴徒は復讐もできず我勝ちに逃げ出し、ロンドンでの乱は収まる。各地でタイラに呼応して起こった騒擾について、やはりその非道さが最大限に強調されて語られたあと、話はこの大規模な反乱の集結に向かう。最後にタイラの片腕であったジャック・ストローの裁判と告白の様子が語られる。

> ジャック・ストローは裁判のあいだ傲岸不遜で剛胆な態度を取っていたが、死刑の判決が下るや、罪の意識を伴った恐怖に襲われて、スミスフィールドで王や側近たちの暗殺計画があったことを告白した。もしもウィリアム・ウォルワース卿がワット・タイラを殺していなかったら、この計画は成功していたはずだった。（23）

こうして、「この怪物じみた反乱（this monstrous rebellion）」は集結し、イングランドは、王のまわりにいた勇敢な市民らの功績によって救われ、この行為を記念して、ロンドンの紋章に血染めの短剣がつけられることとなった。

同時代のほかの記述との比較

同じ時代に、この歴史上の一揆がほかにどのように捉えられていたかを見るために、ほかの歴史叙述にも簡単に触れておきたい。ヒュームは『イングランド史』のなかで、当時のイングランドで農民が置かれていた隷属状態が反乱の下地を作ったと論じていて、たしかにジョン・ボールを「扇動的な説教師（a seditious preacher）」と評してはいるが、説教の内容を、「人類の起源が共通であること、自由に対して平等な権利を持つこと、人工的な区別が暴君によるものであること、それから、多くの人びとが貶められて少数のものだけが自分に威厳をつけた結果生じた不正などについての原理」と描写しており、これが、すべての人びとの心に刻み付けられている、原始の状態の平等という概念に非常にうまく適合するので、またたくまに民衆のあいだに広がっ

た、と分析している（289-90）。

ヒュームは、反乱指導者たちを「恥知らずで犯罪的」と評し、「ワット・タイラ」や「ジャック・ストロー」などの名前は自分たちの身分が低いものであることを誇示するための偽名だ、と言っている点は興味深い。この指導者たちに率いられた農民集団が暴徒化し、ジェントリや貴族に危害を加えていることはヒュームも述べているものの、ヒュームの叙述と物語集（ヒストリーズ）の叙述が大きく異なるのは、農奴の廃止、市場における自由な取引、地代の固定化などの農民たちの要求を「それ自体はきわめて理にかなったものである」としている点である。ただしヒュームは、当時の国家はそれを受け入れる用意はないし、それが暴力によって定められるのは正しいことではない、と述べている（291）。

「物語」としては、ドラマ的な意味でのクライマックスとも言える、ワット・タイラの死とそれに続く場面において両者はとくに違いを見せる。王とのさらなる交渉を望んだタイラは、部下をしりぞけて単身、王の行列に向かう。タイラの横柄な態度にたまりかねてウォルワースが剣で切りかかることは確かだが、物語集（ヒストリーズ）の叙述とは異なって、ウォルワースが一刺しでタイラを討ちとったのではなく、倒れたタイラにほかの王の従者がばらばらと駆け寄ってとどめを指す。さらに、物語集（ヒストリーズ）では、首領を倒されて蜘蛛の子を散らすように逃げて行く反乱軍であるが、ヒュームによると、復讐しようと王の軍に立ち向かおうとする。それをリチャードが威厳をもって説得に当たり、それ以上の流血を避けて反乱軍を解散させることになっている（292）。

反乱をよしとはしないまでも、その大義には聞くべきものがあるとするヒュームに対して、物語集（ヒストリーズ）においては反乱者たちを描写する言葉は激烈で、ジョン・ボール、ワット・タイラ、ジャック・ストローなど首謀者たちは秩序や正義を顧みず、実は臆病であるのに傲岸に振る舞い、人を恨む心が強くしかも強欲なように描かれている。そのうえ、農民軍が略奪や殺人を好んで行ったように描かれる。だまし討ちのようなウォルワースによるタイラの殺害は、農民軍の非道さによって見事なまでに正当化される。ヒュームの記述にはないが、ウォルワースはロンドンに入ろうとする反乱軍との交渉にあたるなど、物語集（ヒストリーズ）においては重要な役割が与えられているうえに、話の結末として、タイラを殺害したときの短剣がロンドン市の紋章に入っていることが述べられ、物語のなかにおける重要性も大きい。語り手、〈読者（オーディエンス）＝聴衆〉ともに、その視点と共感は完全に王とその側近、あるいはロンドン市長の側にあり、暴動を制圧し抑圧する勢力と一体化されている。人頭税の重さに苦しみ、ついに騒擾を起こすことになった民衆に対する共感も理解もない。また、この歴史叙述は、反乱そのものに対する評価がきわめて道徳的で、それも為政者の立場に立った道徳的観点からの評価を一方的に下している。物語集（ヒストリーズ）の語り手にとって、この反乱は「怪物的」でしかなく、人頭税が農民に負担を強いるものであることについて言及をしてはいても、語り手にとって、反乱を正当化するものとは決してなり得ない。

ここで検討した物語集（ヒストリーズ）に関して言えば、貧窮の末に人びとが試みた暴動に対して、同情的な立場を取らないものがあることが確認された。先にも触れたように、物語集（ヒストリーズ）は、「ヒストリー」という言葉を「物語」の意味と、「歴史」の意味との両方に用いるから、先述のように、物語集（ヒストリーズ）の〈読者（オーディエンス）＝聴衆〉には、片方がフィクションでありもう片方が史実に則ったものであるという意識はおそらく希薄だっただろう。したがって、二つの物語に描かれる騒乱を区別する意識もなかっ

たはずだ。どちらも同じくらいのリアリティを持って、ということは、逆に言えば、ワット・タイラの乱も、トムの冒険と同じ程度でしかないリアリティで〈読者（オーディエンス）＝聴衆〉に伝えられたと考えられはしないだろうか。いずれの物語についても、遠い過去の世界の「反乱者」たちが「法」と「秩序」の名の下に惨殺されることは、〈読者（オーディエンス）＝聴衆〉の頭を悩ませる問題ではなかったのだろう。

民衆の保守性の発露

言うまでもなく、物語集（ヒストリーズ）の登場人物も語り手も常にこういうスタンスを取っているわけではない。例えば、『ウェストミンスターの背高メグ（*The Life and Adventures of Long Meg of Westminster*）』は、ランカスタから出てきて宿屋の奉公人となる女傑の物語において、腕っぷしが強くどんな喧嘩や決闘にも負けたことのないメグは、本当に困っているものからは金を取らない主義を貫いており、物語を通していつも社会的弱者の味方だった。そのほか、王や悪代官と闘いつづけるロビン・フッドも物語集（ヒストリーズ）の主人公として有名である。また、貴族や地主、町長や高位の聖職者をからかいや嘲りの対象とする笑話集が数多く見られるのも確かである。これらを見ると、物語集（ヒストリーズ）は、やはり民衆の味方だと思われるかもしれない。

しかし、物語集（ヒストリーズ）が常に民衆の味方とは限らないことは、あらためて認識しておく必要がある。物語集（ヒストリーズ）が社会的弱者や民衆に対する攻撃的な態度を取ることがあるのは、その読者層の幅と関係があるかもしれない。〈読者（オーディエンス）＝聴衆〉が必ずしも社会の下層にいるとは限らないとすれば、共感の対象はさまざまなところに移りうるとも考えられる。物語集（ヒストリーズ）を「民衆」という言葉と無批判に結びつけることには慎重でありたい。それでもなお、物語集（ヒストリーズ）の読者をいかに広く捉えたとしても、その中核的な部分に民衆がいたことは間違いない。そうだとすれば、そういう読者を持つ物語集（ヒストリーズ）が社会的弱者を見下し、自らの置かれた苦境から脱出しようとする試みに対して敵意を剥き出しにすることに対して、どういう説明が可能だろうか。

ここで、一つの比較の対象として、物語集（ヒストリーズ）に比較的近いところにあった、別種の印刷物を検討してみよう。物語集（ヒストリーズ）と、それが代表する（と思われた）文化を激しく非難したハンナ・モアは、物語集（ヒストリーズ）とよく似た装丁やページ数をしていながら、勤勉や社会のなかで自らの分をわきまえること、などを説いた『廉価版道徳叢書（*Cheap Repository Tracts*）』というパンフレットを大量に書いて廉価で販売した。その一冊、『村の政治（*Village Politics Addressed to All the Mechanics, Journeymen, and Day Labourers in Great Britain*）』（1793年）は体制維持派の鍛冶屋と、トマス・ペインの『人間の権利』を読んで、自分の置かれた境遇に不満を持つようになった石工の対話である。石工は、「自由」を欲し「平等」を求めながらも、それが得られない現状に不満を持っている。そして、自分たちは奴隷のように働かされているのにその労働の上でぬくぬくとしている者がいることをおかしいと言う。それに対して、鍛冶屋は

> 「確かに物価は高いが、反乱や人殺しをして安くなるもんじゃない。[…] それに、正直なジェントルマンが平等派の連中なんかに惑わされないでいられれば、状態はどんどん良くなっていくんだぜ。騒ぎを起こせば起こすだけ、余計に金を払わなければならなくなるんだ」

と言い（11）、人は平等だろうという石工に対して、「もし、お前がそう思うんなら、それは神様

と喧嘩することになる。女というものは男より下だし、子どもは母親より下だし、召使いは主人よりも下にいるもんだ」(12) と言う。

民衆のリーダーとして立ち上がったワット・タイラを、口をきわめて非難する物語集（ヒストリーズ）をこのようなテクストと比べたとき、その語り手が、これまで考えられていたよりもずっとここに見られるようなモアに近い立場を取っていたことがわかる。モアが目にした物語集（ヒストリーズ）は、例えば主人公の性的に放埒な冒険を描く、『不埒なトム』のような本であったのかもしれないが、モアの言う「卑俗な出版物」のなかにこういうものもあることを知っていたのだろうか。先に見たとおり、モアが「民衆向け」に説いた体制維持という価値観は、物語集（ヒストリーズ）のなかにもあった。

結び

以上、検討して来た物語集（ヒストリーズ）が体現する価値観をまとめてみると、登場人物が多少なりとも〈読者＝聴衆（オーディエンス）〉の共感に値すると思われれば同情の対象とされるが、社会体制や秩序を大きく揺るがそうとする人びとは、徹底的かつ執拗な攻撃の対象となり抹殺される。物語集（ヒストリーズ）に表象されている価値観は、その中核的な〈読者＝聴衆（オーディエンス）〉だったと想定される初期近代イングランドの民衆が極めて保守的であったことを示している。ここで扱ったテクストは、ロンドンの出版業者ダイシーのものであることから、その活動時期である1730年代から70年代までのどこか、という程度にまでは限定することができるが、一般には作者だけでなく、出版年代も特定できないので、物語集（ヒストリーズ）を具体的な政治的事象と関連させて議論することは難しい。だが、具体的な事件と結びつけることができないということは、逆に、特定の政治的、社会的状況に左右されない、集団的な価値観を長期にわたって保持していたとも言える。「ポピュラーな」物語であっても、それはコンセンサスを乱すものに冷たく、初期近代イングランドのステイタス・クオを守護しようとする言説の一部を成していたと言える。

17世紀後半から18世紀末まで、物語集（ヒストリーズ）は必ずしも民衆にだけではなく、しかし民衆を中核的な〈読者＝聴衆（オーディエンス）〉として、読まれ、あるいは語られて来たのはほぼ間違いない。だとすれば、以上のように要約される物語集（ヒストリーズ）の価値観の表象は、あまりに「体制」にすり寄りすぎているように思われるかもしれない。それでも、日常の娯楽において、あやふやなリアリティをもった遠い過去の反乱軍が英雄によってこてんぱんにされる物語を楽しんでいた民衆が、その一方で、非日常的な場面では、食料騒擾のような秩序破壊的な行動に参加したことは充分考えられる。民衆が体制や権力に対して示す行動や態度、あるいはそれに対する価値観の現われかたは複層的であって、決して一様ではない。ポピュラー・カルチャーに見られる自律的な道徳観念を研究することと同時に、そこに潜む民衆の権力への恭順に目を向けることは、ポピュラー・カルチャーとエリート・カルチャーとの関係をより包括的に理解するために必要な作業であろう。

引用文献

青山吉信（編）『イギリス史１』（山川出版社、1991年）（第10章　城戸毅）

The Famous and Memorable History of Wat Tyler and Jack Straw. Printed and Sold at the Printing-Office in Bow-Church-Yard, London. [n.d.]

Harris, Tim, ed. *Popular Culture in England, c.1500-1850.* London: Macmillan, 1995.

The History of Thomas Hickathrift. 2 parts. Derby: Printed by J. Drewry. [n.d.]

Hume, David. *The History of England from the invasion of Julius Caesar to The Revolution in 1688.* volume 2. 1778. New York: LibertyClassics, 1983.

Neuburg, V. E. *Popular Literature: a history and guide.* Harmondsworth: Penguin Books, 1977.

Reay, Barry. *Popular Cultures in England 1550-1750.* London and New York: Longman, 1998.

Simmons, R. C. ed. The Dicey and Marshall Catalogue, London, 1764. 30 November, 2009 <http://aweb.bham.ac.uk/DiceyandMarshall/refframe.htm>.

Simons, John, ed. *Guy of Warwick and Other Chapbook Romances: Six Tales from the Popular Literature of Pre-Industrial England.* Exeter: University of Exeter Press, 1998.

Spufford, Margaret. *Small Books and Pleasant Histories: Popular Fiction and its Readership in Seventeenth-Century England.* Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1981.